産業観光
きりゅう紀行 81

三百六十二年の伝統を映す 祇園祭に舞う町衆文化の華

本町二丁目祇園屋台・大幟

第54回を迎える桐生八木節まつり、八木節とともにまつりの両輪となる桐生祇園祭。今年 362 回目の祇園祭は本町二丁目（増子相一町会長）が天王町となり、まつりを彩る祇園屋台と大幟が二丁目内に出現する。

二丁目の巨大な踊屋台は明治 35 年（1902）の制作で二代目となる。前面の龍、背面の唐獅子、牡丹の彫物は高松政吉、襖絵は古川竹雲、正面に掲げられている扁額は高林五峯の書で「縦楽」（じゅうらく）の２文字が刻まれている。「縦楽」の意味するところは「思う存分に楽しむ」であり、当時の町衆の心意気が伝わってくる。屋台の巨大さと一流の技が彩る絢爛豪華な装飾は、当時の織物業による桐生の隆盛ぶりの表れといえる。屋台では８月４日から６日までのまつり期間中、お囃子や神楽など多くのイベントが開催され祇園祭の中心になる。

また、今回は屋台の他に大幟（おおのぼり）も出現する。大幟は明治７年（1874）制作の１対２本の五反のぼりで、立てられると20m近い高さになる。幟には頼山陽の二男・頼復の書で「護国錫盈豊 臨民隆福沢」（国からあふれる恵みをまもり 人々が豊かに安心して暮らせるようにのぞむ）と染抜かれ、平和と幸福への祈りが桐生の空を舞う。正確な記録は残っていないが、二丁目に大幟が立つのは 80 年から 100 年ぶりという説もあり、歴史的にも希少な機会に大きな注目が集まりそうだ。

本町二丁目では桐生祇園祭の素晴らしさやまつりの魅力を広く伝えようと、祇園祭オリジナルのポストカードとクリアファイルを作成。まつり期間中、御旅所などで販売する。